

中期経営計画「Go Beyond 2026 革新」

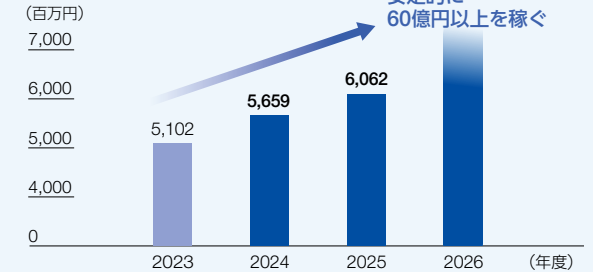
基本方針

- 1 安定的に連結純利益
60億円以上を稼ぐ
- 2 将来100億円を
稼ぐための構造改革の実行

経営指標

	FY2023	FY2024	FY2025	FY2026計画
連結売上高	1375億円	1418億円	1524億円	1560億円
連結営業利益	62億円	79億円	93億円	91億円
連結営業利益率	4.5%	5.5%	6.1%	5.8%
連結経常利益	65億円	81億円	96億円	93億円
連結純利益	51億円	56億円	61億円	70億円

連結純利益



01

主要施策 グループ経営の最適化

- 赤字グループ会社の撲滅
- 関係会社の個社別成長戦略の実行
- 全体最適を見据えた生産体制の再編

グループ経営の最適化を図るため、3つの具体策を中心に取り組みを進めています。

赤字会社数の推移

経営層による直接進捗管理により、残る赤字会社であるBONLEX EUROPE S.R.L.は2025年度に営業黒字を達成し、マーベリックパートナーズ(株)も2026年度中の黒字化が予想されます。

関係会社の個社別成長戦略の実行

課題会社に対し、社長のリーダーシップのもと改善を進め、グループシナジーの創出を図ります。

全体最適を見据えた生産体制の再編

2025年度には佐野工場を閉鎖し、一部事業をグループ会社へ移管しました。また、(株)ボンパックでジッパー生産を開始するとともに、タキロンシーアイシビル(株)では不採算事業から撤退し、栃木工場からシビル製品の製造を受け入れます。こうした事業領域やグループ内機能の枠を超えた大局的な取り組みにより、今後もタキロンシーアイグループが最大限のシナジーを発揮できる体制の構築を進めます。

■赤字会社ゼロの推移

FY2022実績	9社
FY2023実績	3社
FY2024実績	2社 BONLEX EUROPE S.R.L. マーベリックパートナーズ(株)
FY2025実績	2社

■グループ会社数の推移

FY2023実績	22社
FY2024実績	22社
FY2025実績	24社 + CKアドテック(株) + サイトウ種苗(株)

■生産拠点数の推移

FY2023実績	31拠点
FY2024実績	30拠点 - 三和サインワークス(株) 埼玉工場
FY2025実績	29拠点 - 佐野工場

02

主要施策 新製品・新事業の創出

- 新総合研究所設立による技術力の集約と重点注力事業の強化・育成
- 高付加価値分野への研究ポートフォリオの展開と経営資源投入
- 顧客ニーズを超える商品開発に向けた新技術の創出・導入
- 戦略的な知財獲得による競争優位性の確立

2026年4月に三田総合研究所が開所しました。これにより、研究開発機能および新事業領域が集約され、専門分野を超えた発想や知の融合を図ります。タキロンシーアイグループの技術HUB拠点として、多様な社会課題の解決に貢献する新技術・新材料・新製品の創出を目指します。

研究開発案件の例



電子材料向け超微粒子マテリアル



新ビジネス等開発奨励規程

年間売上総利益が20億円以上に成長した新製品等を対象に、研究・商品開発に従事したチームに対して売上総利益の一定割合を報奨金として継続支給する制度を導入、制度面からも新製品・新事業の創出を後押しします。

HOW どう挑むのか

中期経営計画「Go Beyond 2026 革新」

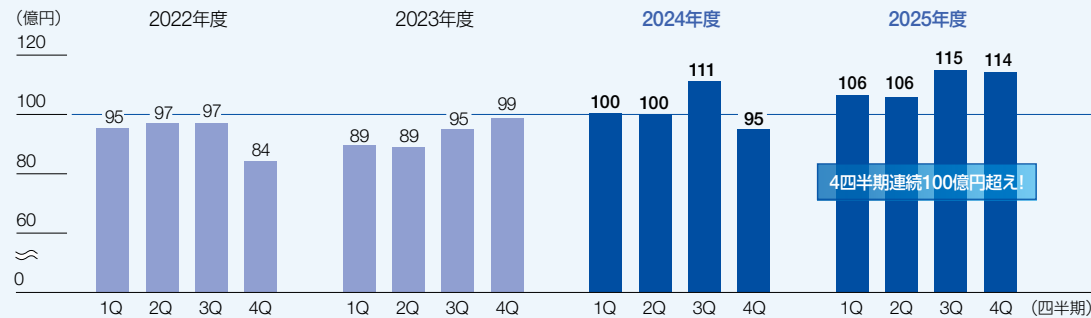
03

主要施策 現場力の徹底的な強化

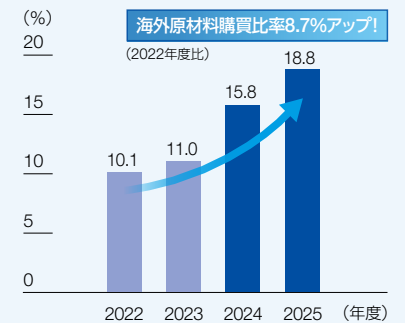
- 製造コスト低減のあくなき追求
- 効率化・省力化の推進(DX含む)
- 他社に打ち勝つ営業の実践
- 戦略的な原材料購買体制の構築

各現場での取り組みの結果、工場での生産性の改善がみられ、2025年度は売上総利益が4四半期連続で100億円超えを達成しました。また、原材料の海外からの調達も積極的に進め、収益改善に向けた取り組みを着実に実行しています。これからも競争力強化に向けて現場力の強化に取り組めます。

売上総利益推移



海外原材料購買比率



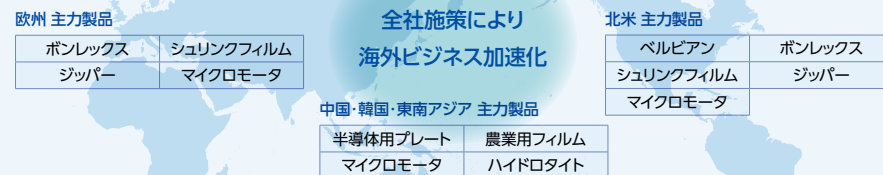
04

主要施策 海外ビジネスの拡大

- 北米・欧州エリアへの販売強化と収益回復
- 中国エリアでの現地販売強化とアジアエリアの拡販・シェア奪回
- 本社支援による海外駐在促進による活動強化

事業ごとの海外事業戦略を抜本的に見直し、エリア戦略を加速させます。

エリア戦略の徹底



SCIK工場移転

上海希愛化成電子有限公司(SCIK)は、マイクロモータ市場の拡大に伴う将来的な自動化設備の導入を見据え、2026年2月に上海市松江區に工場を移転しました。



BACでのジッパー生産開始

BONSET AMERICA CORPORATION(BAC)は、これまでのシュリンクフィルムの製造・販売に加え、ジッパーテープの商業生産を開始します。(2026年度より)



05

主要施策 M&Aの加速

- 石化メーカー事業再編対応および残存者利益の獲得を追求したM&A
- 技術の獲得、海外事業拡大および販売拡大を追求したM&A

タキロンシーアイグループの事業拡大や技術向上に資する案件の取り込みにより、非連続的成長を加速させていきます。

買収ターゲットの設定と実績

		2024年度	2025年度		2026年度
		サイトウ種苗株	CKアドテック株 (旧・CIPSアドバンス株)	他社商権継承	中井工業グループ
事業再編対応型	・大手石化メーカー再編に伴い外出しされる樹脂加工事業の獲得			●	●
シェア拡大型	・シェア拡大が見込める同業他社の買収			●	●
技術獲得型	・新規分野への参入に貢献するコア技術の保有企業 ・バリューチェーン強化に資する樹脂加工技術保有企業			●	●
国内バリューチェーン拡大型	・国内バリューチェーン拡大に資する代理店、販売会社の買収	●	●	●	
海外事業拡大型	・海外売上高の拡大を効果的に推進可能な販売ネットワーク獲得 ・海外技術・知財ライセンスの取得				
主管部署		アグリ事業部	高機能材事業部	包材事業部	フィルム事業本部

特集 世界を変える新素材が、ここから生まれる

Insight into the New Frontier 三田総合研究所

2026年4月1日、兵庫県三田市に「三田総合研究所」がオープンしました。当社グループの各拠点に点在していた研究開発機能を集約した新たな研究開発拠点です。約45,000㎡の敷地に延べ床面積約9,000㎡の施設を備え、約60人の研究者・技術者が勤務しています。専門分野を超えた発想や知見を融合し、大学や研究機関、提携企業とのオープンイノベーションを推進する環境も整備されています。

若手社員が
レポート!



2025年に入社し、三田総合研究所で樹脂製品の表面機能付与の研究員として働く木村です。当社グループの多彩な技術と専門人材が集う研究所の魅力をレポートし、現場で働く研究員の先輩にも新しい研究所ができてからの変化などを聞きました。

2025年入社
研究開発部 表面機能開発グループ

木村 誠

特集 三田総合研究所

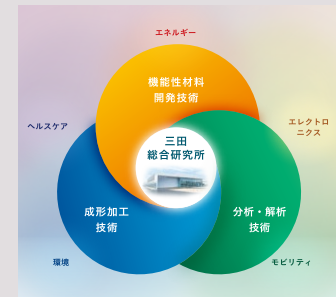


コンセプトは— 近未来型のオープンな 研究空間

三田総合研究所では、当社グループの新たなランドマークとして「魅せる」というコンセプトが空間の随所に息づいています。1500種類以上の設備機器が使いやすく配置され、配線を極力見せない設計にもその思想が反映されています。事務所・分析室・試験室をつなぐ「マグネットコア」では自然と会話や情報交換が生まれ、全面ガラス張りのラビは研究現場の活気を感じさせます。自然光と緑に包まれたラウンジも、発想や交流を促す場として機能しています。

当社技術力の集約拠点 「技術HUB」として 新たな価値創出を目指す

三田総合研究所には、これまで各拠点で培われてきた技術や知見が集まり、分野を越えた協働が広がっています。樹脂成形加工技術を核に、分析・解析技術や機能性材料開発技術を掛け合わせたシナジーにより、新たな価値創出に挑み続けています。当社グループの「技術HUB」として当社グループ内の様々な技術力の連携を促進し、さらに産官学連携によるオープンイノベーションも推進して、環境、エネルギー、モビリティ、ヘルスケア、エレクトロニクスといった成長領域で未来の事業の種を育んでいます。



特集 三田総合研究所

研究開発部長メッセージ

多様な専門性を持つメンバーが集う「共創の拠点」に

各拠点で培われてきた技術や知見、多様な専門性を持つ人材が集うことで、新たなチャレンジを加速する環境が整いました。「技術HUB」として、独自の成形加工技術に自社ならではの材料技術を組み合わせ、他社には真似できない高付加価値な製品を生み出していくことが、三田総合研究所の大きな役割です。

こうした研究開発を支えるのは、設備や技術だけではなく「人」の力です。三田総合研究所は、多様な専門性を持つメンバーが互いに刺激し合いながら成長する「共創の拠点」でもあります。私は、「三田の誰々に聞けば分かる」と頼られる専門家が数多く育ち、多様な知見が交わることで新たな価値が生まれることを期待しています。

また、三田総合研究所には、タキロンシーアイの100年を超える歴史、様々な商品群、および、未来に向けた研究開発を紹介する「未来館」という展示スペースも設けました。これまでに培った技術の蓄積を集約し、この三田から未来のコア事業を支える製品や技術を着実に生み出していく拠点として、さらなる発展を目指してまいります。

研究開発部長
中田 将裕



互いの仕事が見え、研究開発を活性化させるガラス張りのラボ



自然と交流が生まれ、情報共有やアイデア創出を促す「マグネットコア」



「過去」「現在」「未来」の3つのパートから当社技術の歩みと未来を伝える展示スペース「未来館」

My Discovery Notes

社員の交流が自然に生まれる

「働きやすさ」にこだわった研究所

この春にオープンしたばかりの三田総合研究所では、部門や専門分野の垣根を越えた交流が自然に生まれ、日々新たな発見や気づきが育まれています。社員の声を反映して設計された施設は、設備の配置にも工夫が凝らされており、研究者が働きやすい環境づくりへのこだわりを感じました。

さらに知財部も同じ拠点にすることで、研究開発と知財の連携が一層深まり、より戦略的に研究開発を推進できる体制が整っています。「未来館」に息づく技術の蓄積と、未来に向けて挑戦を続ける研究現場。その両方が交わる三田から、次代のコア事業を支える製品・技術、そして新たな価値が生まれていく大きな可能性を感じました。



特集 三田総合研究所

難しいテーマも仲間と支え合い、次世代の製品づくりに挑戦 **Voices**
from the LAB三田総合研究所ができて
何が変わりましたか？

山本 当研究所の開設により、実験設備や分析機器が大幅に充実しました。以前は難しかったナノ粒子分野の研究も進めやすくなり、高度な評価や分析が可能になっています。研究テーマをより効率的に推進できる環境が整ったと感じています。

大島 拠点統合によって、これまで別の拠点で働いていたメンバーと日常的にコミュニケーションを取れるようになりました。研究テーマについて相談する機会も増え、多くの気づきや刺激を受けながら学びの多い毎日を過ごしています。

津守 人と設備が一カ所に集まったことが最も大きな変化です。知財部のメンバーとも気軽に相談できるようになり、特許面での連携もスムーズになりました。また、各拠点に分散していた試作機も集約され、幅広い検証や評価を効率的に行える環境になっています。

どんな研究がワクワクしますか？

山本 まだ世の中になく最先端の製品開発です。現在はナノ粒子技術を活用した半導体やモビリティ分野の研究に取り組んでいます。新しい技術やアイデアを形にするため試行錯誤を重ねる日々ですが、その挑戦そのものに大きな面白さを感じています。

大島 暮らしに役立つオンリーワンの製品を生み出す研究にワクワクします。現在は食品包装の研究に取り組んでいますが、思い通りの結果が得られないことが少なくありません。それでも、いつか人々の暮らしに欠かせない製品を世に届けたいという思

いで、日々研究を続けています。

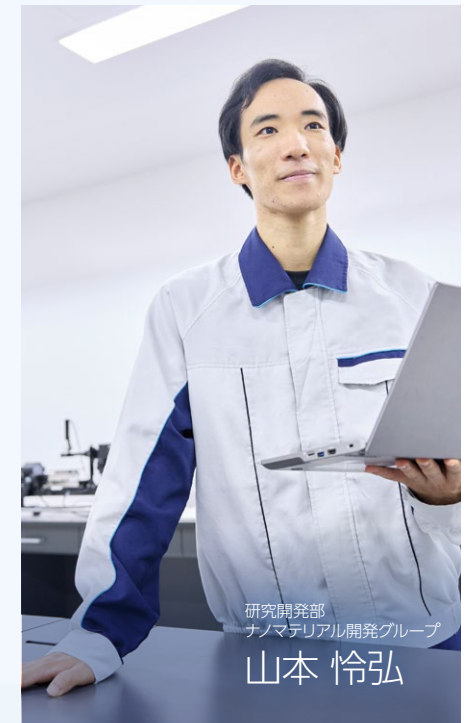
津守 これから需要が高まっていく次世代製品の研究に魅力を感じています。現在はエレクトロニクス関連のフィルム開発を担当しています。難しい課題が多いものの、その分、先端分野の技術や知識に触れられ、ワクワクしながら研究を進めています。

やりがいを感じるときは
どんなときですか？

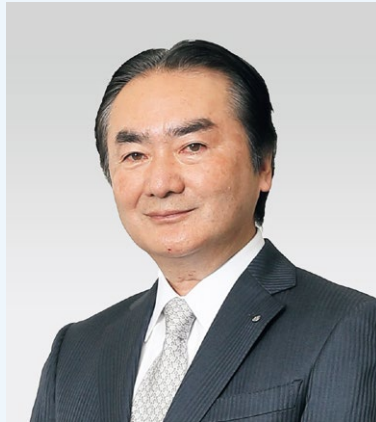
山本 様々なメンバーと協力しながら課題を解決できたときです。私の研究テーマはグループ会社と連携して進めています。定期的な情報共有や意見交換を重ねながら課題解決に取り組み、一人では難しいテーマを前進させられたときに大きなやりがいを感じます。

大島 困難な課題を乗り越えられたときです。当研究所には各分野のスペシャリストが集まっており、困ったときには自然とサポートの輪が広がります。仲間と力を合わせて挑戦し、成果につながれたときにとても達成感があります。

津守 顧客評価で良い結果をいただけたときです。改善要望を何度も受ける中で、合格評価を得た瞬間は「やった!」という喜びとともにやりがいを強く実感します。

研究開発部
フィルム開発グループ
津守 千亜希研究開発部
フィルム開発グループ
大島 滉主研究開発部
ナノマテリアル開発グループ
山本 怜弘

研究開発



新設・開所した三田総合研究所を軸に
タキロンシーアイの新領域を開拓し、
売上収益拡大と企業価値向上を
加速いたします。

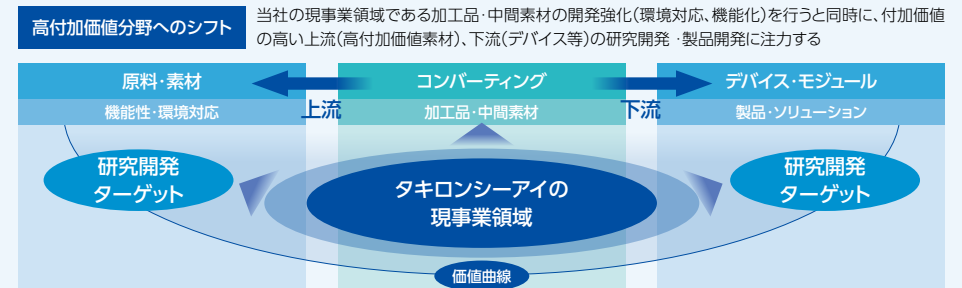
代表取締役社長
兼 研究開発本部長
福田 祐士

4月1日に三田総合研究所が開所いたしました。建設工期は2024年12月初めから2025年12月末までの約13か月に及びました。社内外関係者の皆さまのご尽力のおかげで、予定通り無事開所できたことを、心よりお礼申し上げます。メーカーである当社グループが、進化し続ける社会ニーズに迅速に応え、新製品・新技術を創出し続けるために、研究・開発力の強化は最大の経営課題の一つです。これまで滋賀工場(滋賀県湖南市)、網干工場(兵庫県たつの市)、岡山工場(岡山県新見市)に分散していた研究・開発機能を、当社グループの研究・開発の中核拠点と位置付ける三田総合研究所(兵庫県三田市テクノパーク)に集約し、機能間の連携を強化することでシナジーの創出を図ります。そして、今後さらなる成長が見込まれるモビリティ分野、ヘルスケア・メディカル分野、半導体・通信技術分野などに向けた技術開発を促進し、「中期経営計画 Go Beyond 2026 革新」の主要施策である新製品・新技術の創出を加速させていただきます。

研究開発方針

- 1 20億円創出の基盤作り
- 2 中長期戦略(5分野別戦略)の遂行による高付加価値分野への参入
- 3 産官学連携オープンイノベーション協業テーマの“事業化”企画の加速
- 4 各事業本部の事業拡大・製品強化に資するコア技術の深耕と新製品開発支援
- 5 全社知財リテラシーの向上と各事業本部との“新領域参入戦略の起案・IPL提案”

研究開発戦略の全体像



研究開発に注力する事業ドメインの選定

事業ドメイン	注力のポイント	SDGsとの関係
包材・容器	環境対応への市場の変化をとらえた開発	12 持続可能な消費と生産
モビリティ	車体軽量化、EV普及の要求性能変化への対応	6 安全な水と衛生、8 持続可能な産業と雇用、9 持続可能な都市とインフラ
ヘルスケア・メディカル	予防医療/パーソナル医療/医療×IoTへの対応	3 健全な生活、9 持続可能な都市とインフラ
超微粒子マテリアル	超微粒子マテリアル事業の強化、新たなコア技術育成の研究	5 健全な生活、9 持続可能な都市とインフラ
機能フィルム(エレクトロニクス)	半導体分野、通信技術の進化への対応	7 持続可能なエネルギー、9 持続可能な都市とインフラ

将来の市場環境の変化を見据え、成長が期待される分野、メーカーとして必須の環境分野、当社の特徴あるコア技術を活用して成長が見込める分野を、5つの注力する事業ドメインとして設定。

研究開発体制図



HOW どう挑むのか

研究開発

TOPICS

モノマテリアル包材向けバリアタイプポリエチレンフィルムを開発

日用品や食品のパウチは、強度、バリア性等の観点から複数素材の複合フィルムが用いられていますが、リサイクルが容易な単一素材化＝モノマテリアル包材の要望が高まっています。当社が開発中のモノマテリアル包材向けポリエチレンフィルムは、材料および製造プロセスの工夫により、優れた耐熱性・製袋加工性を有し、また、バリア性にも優れています。開発の最終段階を迎え、2026年度中の試験販売を目指しています。



モノマテリアル包材(Recyclable包材)
写真:当社モノマテリアルジッパーとモノマテリアルフィルムにて製袋したもの

モビリティの軽量化と高機能化に貢献する次世代材料・部品技術の開発を推進

当社は2025年度にモビリティ市場開発部を発足し、同分野を研究開発の重点テーマとしています。電動化、軽量化、意匠性向上、環境負荷低減への要望が高まる中、省スペース化に貢献する「長尺バスバー」、軽量化による航続距離の向上に寄与する「ポリカーボネート製ウィンドウ・ルーフ」、塗装工程の削減によるCO₂排出量低減とPP製外装部品とのモノマテリアル化を実現する「外装用加飾フィルム」の開発を行っています。今年度は上記開発品を「人とくるまのテクノロジー展2026」にて展示し、モビリティ実装に向けた顧客提案活動の幅を広げています。今後も研究開発本部を起点に当社の保有する材料設計、成形加工、表面機能付与の技術を組み合わせ、次世代モビリティの環境性能と付加価値向上に貢献していきます。



電気自動車向け配線部材「バスバー」



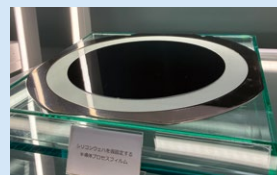
自動車外装向け「加飾フィルム」



超小型モビリティmibot「樹脂グレージング」
(ルーフ・サイドウィンドウに採用)

半導体プロセスフィルムを開発

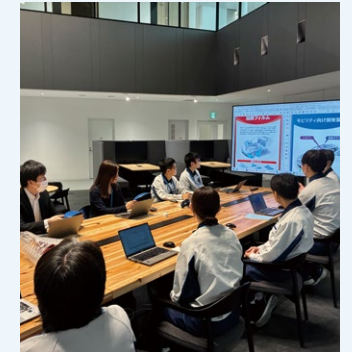
AIやデータセンターをはじめ半導体業界が活況を呈していますが、この度、材料配合や製造条件の工夫により、等方性と低温伸張性に優れたダイシングテープ用フィルムを開発いたしました。お客さままでの評価も最終段階に入り、2026年度の採用決定を目指しています。



半導体プロセスフィルム

知的財産への取り組み

中期経営計画の主要施策である「新製品・新事業の創出」のため、知的財産への投資について「1.競争優位の確立に向けた知的財産創出活動の実践」「2.事業遂行を担保する知的財産権クリアランス」「3.事業の推進を支える知的財産人材の育成」の基本方針を定め、知財活動の全社的強化に努めています。2025年度は、月1回の頻度で知財連携会を開催、事業部門に知見を共有することで、知財リテラシー向上を推進しています。これにより、商品開発段階から知的財産を意識した取り組みが促進され、競争力のある製品づくりに貢献しています。

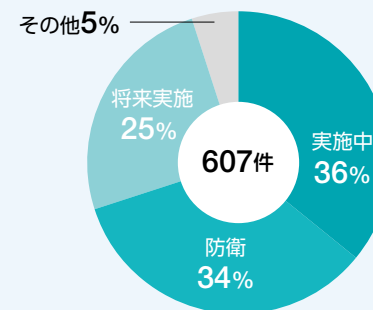


知財連携会の様子

生成AIの活用

生成AIを活用することで、技術資料から発明提案書を作成したり、調査ポイントを簡潔にまとめた文章から先行技術を抽出したりするなど、業務の効率化を推進しています。現時点では、生成AIによるアウトプットの精度を検証しながら進めている段階ですが、将来的には定型業務の一部を生成AIに移行することで速やかなレスポンスを実現し、さらにはIPL提案にも生成AIを活用するなど、AIの活用を前提とした新たな知財活動を目指しています。

タキロンシーアイ保有特許および出願中特許の実施状況(国内)



タキロンシーアイグループ特許出願件数(国内)

